

# 京都部落問題 研究資料センター通信

第37号

発行日 2014年10月25日（年4回発行） 編集・発行 京都部落問題研究資料センター

## 2014年度 部落史連続講座 II

第1回 11月13日（木） 山室軍平と京都  
— 同志社時代を中心に —

講師：室田 保夫さん  
（関西学院大学教授）

第2回 11月21日（金） 石井十次と京都・大阪

講師：田中 和男さん  
（龍谷大学非常勤講師）

第3回 11月28日（金） 近代京都の施薬院

講師：八木 聖弥さん  
（京都府立医科大学准教授）

\* \* \* \* \*

時 間 午後6時30分～8時30分

場 所 京都府部落解放センター3階 第2会議室

参加費 無料

～参加希望の方は前日までに電話・FAX・電子メールで連絡ください～

## 本の紹介

## 八木聖弥著 『近代京都の施薬院』

田中 和男

(龍谷大学非常勤講師)

共感(シンパシー)と憐憫(ピティイ)とは異なっている。共感にはする者とされる者との対等性が予感されるのに対して、憐憫は力の強いものが弱いものに対して示す保護や労りが感じ取られる。強者のパターナリズムである。社会福祉や社会保障は、現在でも憐みの歴史にとどまっている。一八七四年の恤救規則やそれを改定して一九三二年から実施された救護法は保護を受ける者の怠惰を問題視し、支援を受ける当事者の選挙権を奪った。いわゆるステイグマの付与である。日本国憲法で生存権規定があっても、生活保護の恩恵としての側面は完全には払拭されていない。

本書は歴史的淵源を奈良時代に持つとされる施薬院を再興したとする観点から、近代京都での貧民医療を実現する努力を行った安藤精軒に焦点を当て、精軒の死去、施薬院の終焉までを詳細にたどった労作である。

本書の内容を私の関心と能力の範囲で紹介したい。

「施薬院再興前史」と副題されている「序」で、奈良時代以来の施薬院の歴史が確認される。天平二(七三〇)年四月一七日、聖武天皇の皇后光明の意向で皇后宮職が施薬院を設置したが、光明皇后は天下飢病之徒を療養するため施薬院だけではなく悲田院を設立した。これ以前の福田思想による聖徳太子の四箇院設立伝説などに触れながら、著者は光明皇后の施薬院設立が他の「寺院の施薬活動とは一線を画する」ことに注目する。施薬院の設立は仏教的な「慈悲行の実践」であるとともに、「鰥寡孤独」を救済する「治世者の徳を万民に知らしめる理世撫民の一環」であった。施薬院は「仁慈を示す手段としての側面がより強かった」という(五頁)。

平安時代になると、八一一年(以下)の年号は煩雑さを避け西暦のみとする)の『日本後紀』に平安京南端の

施薬院に菓園が与えられた記事が現れる。経営を担当した藤原冬嗣の姿勢は私的な仏教信仰と「一族の結合」が前面に出て「儒教的な意味づけはやや薄れる」。冬嗣の子良相は一族を崇親院で保護したりして「施薬院を公的機関に戻そうとした」。紆余曲折しながら「多くの病者が施薬院を利用」したという(六、七頁)。

「有名無実化」した施薬院の活動の復活の可能性は近世にもあった。一五八五年、豊臣秀吉が菓樹院の僧全宗を施薬院使に任命し、施薬院を再興させた。「多くの庶民を対象とした慈善事業であった」が、秀吉の没落と共に「本来の目的は忘却され、再び形骸化」した。ついに明治維新に廃されたという(八、九頁)。

施薬院の歴史に関わっては、享保の改革での江戸小石川養生所の設立があり、明治期になって京都では、明石博高が烏丸一条にあった施薬院邸の下賜を得て病院設立を試みた。このような概略を見た上で、著者は、明治の半ばに、施薬院の「再興」を行った安藤精軒に注目をする。多くの貧民を救済する慈善事業を行うためには著者が言うように「高邁な精神が必要」

であろう。同じ一族・家族、知人・友人など親密圏や、慈悲・憐れみという宗教的実践を超えた公共的・世俗的な関心が必要である。慈善事業を継続するためには「人材と経済的基盤の確保が必須」である(八、九頁)。私たちも、著者の導きに従い、中心人物の実践の跡を簡単ながら追跡していこう。

## 第一章 東三本木治療場の創設

一八三五年、福井藩医山田道意の次男として生まれた安藤精軒は一四歳で笠原良策から蘭方医学を学び、一九歳で上洛、安藤桂洲の門下生となり、五九年、桂洲の娘と結婚し安藤家を継いだ。医者として成長する安藤精軒の周りには、近世中期の日本に紹介された西洋医学の知識と実践を鎖国を生きる民衆に受け入れてもらおうとする努力が息づいていた。中央政治では一八二五年、異国船打払い令、三九年、蛮社の獄などで外国・蘭学などが批判にさらされる中で、京都では四九年、笠原、安藤桂洲、日野鼎哉などの努力で天然痘予防のための種痘の実行を行った。

桂洲の養子となった安藤精軒は、「勤皇家としての側面」があった。

若狭小浜藩出身の桂洲は安政の大獄で捕まり病死する梅田雲浜と知己であり、精軒も雲浜を介して山崎闇齋の崎門学派に連なっていた。雲浜死後もその妻千代子と娘を世話をしたり、攘夷派公家の負傷を治療する。戊辰戦争に際しては、三条実美に箱館に国防のための役所を建設することを建議し、実際に箱館に派遣され病院で治療に当たった。五稜郭の戦でも政府軍の医官として参加するが、政府軍が旧幕府軍の負傷兵を「敵視シ保護」しなかったのに対して、精軒は「参謀部ニ建議シテ……欧米各国ニ於テハ軍人ノ患者ヲ療スルハ彼我ノ別ナシト。縦ヒ賊軍タリトモ降ヲ乞フノ上ハ同シク是レ皇国民ナリ。仍テ同一ノ保護アリタシト申立」てたという（二六〇～二七頁、精軒の『回顧談』『日誌』にも同様の記述）。

五稜郭の戦での敵味方を区別しない医療活動を行った旧幕府側の医師としては高松凌雲が著名である。『広辞苑』の高松凌雲の説明には「箱館戦争に際し日本初の赤十字的活動を行う」とあるが、安藤にも先駆者としての資格を認められることができることになる。五稜郭の戦が終わると樺太出張を命ぜ

られ、日露雑居下の樺太の「寒天積雪ニ際シ工夫ノ下肢脱疽」を患った「十余名」の「截断手術」を行わねばならなかった。幸い死亡者はいなかったが翌年にはチフスに精軒も罹って、九死に一生を得て京都に帰ってくる（二九〇～三〇頁）。「勤皇家」としての精軒は天皇に仕えるため東京に赴くことも考えた著者はいう。「結果的に……京都の医療界に身を挺することになるのである」（三三三頁）。彼は市中に居を構え、七二年、乳牛を飼育し牛乳搾取業を始めた。さらに牧羊牛掛として京都府に勤務する。京都府による新英学校及女紅場の設立についても、イギリス人宣教師イーバンス夫妻や梅田雲浜未亡人と娘などを教師として採用することを精軒は榎村知事などに推薦した。箱館戦争での敵味方を区別しない治療を求めたのと同様に、京都での新しい教育についてもキリスト教と仏教、日本人と外国人の区別を認めない姿勢を保った。

府行政と接触が始まり、精軒は府立の京都療病院の当直医心得に命じられることで再び医療と医療行政ともかわることになる。府から七四年、種痘館医員を命じられたが、七九年からは宮内省御用掛を命じられ「桂宮参診」が申し付けられた（四三頁）。桂宮は二年後に病没するが「勤皇家である精軒にとつて……大きな名譽であった」とされる。一方、一八八一年には「貧民患者ヲ救療」するため「有志者ト謀リ治療場」を水西荘に開設する。ここに、医療ではあるが、貧民のための医療という施薬院の再興につながる一歩が刻まれたことになる。四年前に、精軒が伊藤博文に建議したことや、八二年に活字印刷した精軒の説明「治療場演義」に「身体ニ疾病痛苦」あることの「不幸」、特に「貧困ニシテ医ヲ迎へ薬ヲ求ムルニ力ナク……死ニ瀕」することの堪えがたさを述べ、「同胞社会」では「傍観スルノ理」がないのであり「人ノ道タル危ヲ救ヒ苦ヲ助クルハ天然ノ然ラシムル所ニシテ、慈善モ亦之ヨリ大ナルハナシ」。その前史として「施薬院」を挙げ、治療場の「本旨」もこれ以外にないとす。桂宮遺族からの下賜金と「今更ニ衆力ヲ藉リ資金積立ノ良法ヲ設」けるなど財政的な配慮も示した（四五〇～四六頁）。

治療場を始めた水西荘は御所の東の鴨川付近にありかつての頼山陽宅であった。一八三二年、山陽が死去した後、山陽宅の持ち主の推移を検討して著者は、幕末の一八一年までに精軒が水西荘を入手し、その斡旋者として梅田雲浜の可能性を挙げる（五二頁）。水西荘の宿泊者には勤王歌人橘曙覧がいた。周辺に与謝野鉄幹の父で京都岡崎願成寺の与謝野礼蔵がおり、画家の富岡鉄斎が出没する。勤皇家としての精軒をめぐる人脈は興味深い裾野を形成していたことが描き出されている。治療場が設けられた東三本木は新三本木と呼ばれる遊所であった（五六頁）。茶屋、芸者置屋が散在したという。加藤政洋著『京の花街ものがたり』（角川学芸出版、二〇〇九年）によれば、木戸孝允の妻幾松や与謝蕪村の愛妾が新三本木の芸妓であり、一八七〇年には遊廓に認定されたが数年後にはさびれた。しかし一八九七年、芸妓営業地域に指定され、遊廓が再興されそうになるが、京大や女学校の「風俗上の関係」で認定が取り消された。この付近に京都法政学校（立命館）が設立された。

精軒の無料診療は軌道に乗り、八四年には、三周年を記念して、少名毘古那命（日本神話）、神農

(中国)、「ヒポカラテス」(ヒポクラテス・古代ギリシヤ)の「三医祖ヲ追尊シ、祭典ノ式ヲ挙ゲ」た(五六頁)。ここでも、精軒の意識の中で西洋医学の祖の存在は忘却されていない。八六年には、公立避病院(救急病院・隔離病院)の院長代理にも任命され公事に尽くしているが、八七年には、伊藤博文に婦人慈善会設立の建議を行って京都慈恵会医院の影響を受けて京都での「施薬院」開設を示唆したという(六一頁)。東京慈恵会医院は医学教育のみではなく慈善病院を設けて有栖川宮や皇后を総長、総裁に迎え「皇室の資金」で運営される。精軒も同様の方向を求めて、宮内省の侍医局勤務(京都在勤)を命じられる。また山階宮とも診察を通して交流を深める。

一八八七年六月には、東京に做つた京都共立恵愛医院を開設する。「賤民の疾病をたすけて力役労作の義務を尽さしめ、国家の福祉を増さしめん」が目的であり、慈善によって怠惰な貧民を養成することとは否定されている(六八、六九頁『日出新聞』)。『概則』には本院が貧窮者の治療が中心であること、治療を求める患者は「必らず治療券ヲ持参」すること、治療券は各

組戸長役場で申し受けることを求めている。さらに「汎ク衆人ノ望ミニ応ジ診察治療スベシ」として、貧民以外の中間層に対する「相当ノ薬価」での診療を認めている(六九、七〇頁)。しかし、この試みは翌年に中止となり、九一年には廃院が決まった。この間、精軒は京都での赤十字社(博愛社)設立を申し、篤志看護婦人会の創設にも関与している。こうした「貧民治療」や赤十字の関りの背景に、著者は、高松凌雲の影響を予想しているが、一方では「勤皇家たる精軒」にとつて貧民患者への無料診療が「天皇の東上に伴わず京都に留まった医師たる自分のなしうる忠義と考えた」ともしている(七六頁)。

## 第二章 施薬院の再興

精軒は、天皇への忠義として貧民救済を行う施薬院設立を最終目標としながら、自らの治療場でその活動を行い、一方で開業医の利益と親睦を擁護する京都医会(医師会)の設立にも心を配っていた。一八八七年に発起人に精軒が名を連ねた京都医会が九〇年に設立されると、精軒は副会長に選出された。

早速、精軒は施薬院再興を建議する。千年以上の帝都で療病院・悲田院・施薬院などがあって「鰥寡孤独・貧窮無産ノ者」を保全した歴史に触れながら、維新以来の京都市民の努力に鑑み「我朝古昔至仁ノ御事業ノ完全ナルヲ追欽」して、施薬院を再興することを求めた。九二年には貧病院設立の發議を精軒は行い、医会内に調査委員が設けられ報告書が提出される。著者によれば、精軒は日本医会での施薬院再興、京都医会での貧病院設立を希望したが、日本医会が反応をせず、京都医会の貧病院構想が施薬院再興に定まっていた(九八頁)。

京都医会の内部にも「ジレンマ」があったという。医会の寄付などで運営される公立療病院が、貧民ではなく一般の患者を治療する「営業主義」は批判の対象であり、療病院は、施療患者の増加のため、経費が欠乏するのを補うためにだけ「自費患者ヲ取扱」とことが認められた。この役割分担を前提にして「施薬院の再興は開業医に歓迎された」と著者はいう。さらに続けて開業医たちは「『貧民階層』への偏見ないしは差別感情もあって、主体的に携わることを

望むわけではなかったのである」という興味深い論点を提示している(一〇一、一〇二頁)。しかしどのような偏見・差別感情なのかは不明である。精軒自身がこの偏見・差別感情から免れていたのかという点は叙述の中でも探求されていない。

精軒の企図した施薬院再興は京都医会とは一線を画しつつ具体化していく。九四年、精軒は施薬院設立協会を立ち上げ、京都府知事 中井弘、半井澄、中村栄助、富岡百鍊(鉄斎)など市中の実力者を委員長などに担ぎ出し、医者だけではなく、神官・僧侶・官吏・商工業者に協力を求めた。設立協会の「賛助ヲ得テ維持」される施薬院規則には「施薬治療ヲ受クル者ハ京都市区長ノ証明アル者ニ限ル」とされた(一〇五頁)。肝心の市中の医師の協力が少なかったため、「柳原町から長年にわたり赤貧者に施療施薬をしたことにより感謝状を贈られた中村四郎に協力を求めたり、与謝野礼蔵の次男照幢の養父である赤松連城(浄土真宗本願寺派)に資金援助を依頼した(一〇九頁)。

一八九七年、施薬院の設立が認可され、知恩院内の保徳院の「仮

設」で施療活動が開始される。改めて開かれた設立協会総会で、主意書・協会規則が配布された。施療院規則には「本院二施療薬ヲ受クル者ハ、警察署長・上下京区長・町村長ノ証明アル本院施療券ヲ所持スル者ニ限ル」と改められている。警察署長が入っていることや施療券を配布していることがうかがわれて興味深い。精軒は協会の会長に華族を据えようとしたが、これは失敗したという。しかし、「施療院慈善講員名簿」には岩倉や九条家の関係者が含まれ、精軒も正七位に叙せられる(一一五頁)。

しかし事業の方は順調に進まない。患者数が減少し、医員の欠席も目立ったという。精軒は一部患者治療の有料化を提案するが、

「無料診療だから無給で従事するが、有料ならば協力しない」と反対した(一二五頁)。貧民医療でお金をとることは、開業医の自由な営業を圧迫すると考えられたのである。精軒は資金確保のため基本金拡大の「講法」を設けようとするがうまくいかず、京都市長の内貴甚三郎、さらに府知事高崎親章に救済を求め、一九〇二年には新たな施療院協会を設立することになった。施療院の経営も精

軒の手から離れていく。その中で市内の精神病院の火災で入院中の精軒の娘が焼け死に、心を痛めた妻も死去するという悲劇も経験する。施療院の方は、協会入会者も集まりだし、診療体制も内科部、外科部、眼科部、さらにこの当時から「国民病」と呼ばれ対応が求められた「結核治療所」を置いて、それぞれに看護婦を組み入れたという(一四六頁)。婦人科、小児科も設置された。手狭になった施療院を移動させる計画も持ち上がったのである。保徳院の西方にある入院院で新しい体制の施療院の活動が再開される。

### 第三章 施療院の発展と終焉

新体制の施療院の運営に精軒が無関係になったわけではない。赤松連城との関係で本願寺派の大日本仏教慈善会財団の経済的支援を受け、精軒も人円会の組織を利用して救護活動を行った。人円会は施療院協会の副会長でもある京都府書記官の藤本充安が主宰し、人生の目的は幸福快樂を円満に取得するといふ人円主義を主張する修養団体であった。音楽会などを開いて恤兵献金を行ったという(一六

五七頁)。本書では余り触れられていないが、日露戦争時、各地に設立される徴兵遺家族の託児や救貧を担った半官半民的組織のひとつであり、日露戦後の地方改良運動や、感化救済事業の中でも救貧・更生、国民統合を下から支える役割を担ったと思われる。精軒の日露戦時期の活動が褒賞されて一九〇八年には金杯が与えられる。勤皇家は国家を下支えする国民主義者に転回していた。

施療院の経営は府市の下付金が減額される一方、個人の寄付が増えたりしている(一七五頁)。本願寺派に施療院事業を委託する案は、皇室からの下賜金を受けているので否決され、幅広い市民からの会費に期待された(一七七頁)。明治末年には、再び施療院の移転問題が浮上する。知恩院付近からの出火で知恩院の防火体制を整えるなどの境内事情もあった(一八七頁)。一九一〇年、知恩院との交渉がまとまり入信院の南隣に土地を得て、建物の無償払下げなどを受けて診療を再開する。精軒の住居も京都市郊外だった山科に移転し、次男仲二郎が浄福寺今出川に移ると精軒も同居した。施療院は貧民治療に加えて、一九〇九年からは行旅

病人の収容にも力を入れた。そのため施設の拡大が志向される。一九一五年、公売に附された公立避病院であった聚楽病院を購入してその地に施療院が移転することに。精軒は、施療院の活動を見守りながら一八年九月七日、死去した。

施療院は二五年には財団法人としての認可を受け、入院患者は公団体、済生会、赤十字社からの委託を受け、患者の数も増加した。二七年の京都市都市計画事業の一環で、敷地の一部が市に買収され、建物の移設が行われた。併せて皮膚科、耳鼻咽喉科の診察室も設けられた。京都府、京都市、内務省、宮内省から寄付金・下賜金をえて、三四年には創設三〇周年記念式が行われる。中村四郎の養子・正勤は施療院協会設立とともに理事となっていたが三〇年には副院長、三七年には院長から三九年に会長となった。四〇年には、厚生大臣表彰を受けた。精軒亡き後も、国家によって活動の正当性を認められた。

三〇年代の日本は戦時体制に進んでいく。三八年に新設された厚生省は健兵健民政策を推進し、施療院は四一年に、京都厚生病院に

改称される。総動員体制の下で、国民健康保険制度が創出され、生活困窮者への医療と助産を受けさせる医療保護法が制定された。四年、管理の責任は京都府に移され京都府中央病院となり、施薬院としての歴史を終えた。

著者は施薬院の歴史をまとめて、「貧困者への差別感情も著しいなか、精軒の志は医療の原点でもあ。医学がいかに進歩しても、人が人を診ることに変わりはない。施薬院は医の本質を具現している」（二五九頁）と施薬院での医療実践を顕彰している。精軒は「勤皇家」として古代の施薬院を再興したと本書は強調していた。天皇に対する忠誠が患者を「人」として見る立場と通底しているかは論証されない。貧困者への差別感情についても、差別感情の具体像は描かれていない。幕末・明治の貧民の置かれた状況の中で、古代の施薬院の「再興」の意味を示す必要が精軒にとっても著者にとっても必要だと思われる。

八木聖弥著『近代京都の施薬院』思文閣出版、二〇一三年九月、三五〇〇円  
八木氏は一九五八年京都市生まれ、同志社大学大学院修了、京都府立医科大学准教授

## 本の紹介

### 小林丈広編著

### 『京都における歴史学の誕生』

—日本史研究の創造者たち—

田良島 哲

(東京国立博物館)

本書は小林丈広氏が主宰される「京都歴史研究会」の活動の成果として刊行された論文集である。

小林氏は長く京都市歴史資料館に勤務されて、京都の地域史に関わり、その中で「『京都の歴史』研究の歴史」という、史学史上かなり大きな課題に有志の研究者とともに取り組んでこられた。

論文の執筆者の多くは日本の（あるいは京都の）「戦後歴史学」の枠組みが解体した一九九〇年代以降に歴史学研究の世界に入った方々で、本書が対象とする明治時代から一九八〇年代までを「歴史」として客観視できる世代と言えよう。史学史研究というと、著作や論文が中心となりがちだが、本書ではアーカイブズ史料も積極的に使われており、近い時代では当事者が存命の場合もあるので聞き取りも

活かされている。

本書を読んで、まず感じたことが三つある。多くのテーマが取り上げられており、さまざまな新しい知見が得られたという点でとても有用な業績だ、というのが一つである。それと同時に、本書を読む中で思い当たる京都の史学史上でけっこう重要ではないだろうかという出来事が、私の知る範囲でもまだかなりある。やはり京都の学問の歴史は奥深い、というのが第二点である。最後は当事者としての多少のなつかしさで、自分自身がその場にいた経験があるためである。なお、以下物故者の敬称は省略させていただく。

全体は、小林氏執筆の「序章」と各分担執筆者による全8章から成り、これに各論文に関連したテーマの「コラム」が7編配されている

る。まずは全体の構成を掲げよう。

- 序章 現場からの史学史を目指して（小林丈広）
  - 第1章 『平安通志』編纂と歴史学—湯本文彦・阿形精一らの模索—（小林丈広）
  - 第2章 長岡京大極殿跡の探求と岡本爺平（玉城玲子）
  - 第3章 海外雄飛時代の歴史学—川島元次郎と京都の歴史—（福家崇洋）
  - 第4章 『京都市史』編纂と歴史学—西田直二郎の挑戦—（入山洋子）
  - 第5章 篠崎勝の前半生—愛媛大学に着任するまで—（松中博）
  - 第6章 林屋辰三郎と戦後京都の日本史研究の環境（佐野方郁）
  - 第7章 部落史への回帰—『京都の部落史』編纂と林屋辰三郎の「復権」—（本郷浩二）
  - 第8章 朝鮮通信使を描いた一絵図の変転（伊東宗裕）
- 論文はおおよそ対象とする時代順に配列されているが、第1、4、

6章は通史的な叙述を含み、全体に占める頁数も多い。この3章が本書のいわば経糸である。これに對して、2、3、5章やコラムにはそれぞれの時代の個別の人物やトピックがとりあげられており、こちらは京都の歴史研究の幅広さを物語る緯糸と言えよう。

この文章では各章の中から現在の私の立場である文化財保護行政と博物館から気がついたことをいくつかりあげて、本書の面白さの一端を紹介したいと思う。

第1章で紹介されている『平安通志』編纂の時期、政府は臨時全国宝物取調局を設置して、系統的な文化財保護行政の展開のために全国的な文化財調査に着手していた。一〇年をかけた調査の成果は古社寺保存法の制定と京都・奈良への帝国博物館の設置として結実するわけである。『平安通志』編纂メンバーの中には後に京都帝国博物館に入った阿形精一、この時期京都にいて後に東京美術学校教授となった大村西崖が含まれているが、『通志』の仕事と宝物取調との間には接点はなかったのだろうか。興味の引かれるところである。

第2章では長岡宮大極殿跡の考証を行った地元の研究者岡本爺平の業績が紹介されている。史跡の保護顕彰には必ず地元で熱心に活動した先駆者がいるものだが、岡本もまたその一人である。一次史料をもとに丹念に事跡が明らかにされており、意義深い論考である。私たちあたりの世代だと、長岡京の研究と保護といえば中山修一が思い浮かぶのだが、おそらく岡本から中山につながる歴史の流れがまだ隠れているのではないだろうか。今後の展開を期待したい。

第4章は、旧『京都市史』の編纂体制が形作られる経過と編纂主任西田直二郎を中心とした関係者の動きをこれまた根本史料である編纂事務局文書をたどりながら明らかにした労作である。編纂がなかなか進まない中で市の理事者側や編纂委員との間で軋轢が生じ、人事の見直しが行われるなど、事業の内情が子細にわかる。京都における歴史研究が京都帝大国史研究室という一つの極しかなかった状態から、さまざまな理由で研究室を離れた若手研究者が集まり、市史編纂事務局がもう一つの極になっていったと評価されている。

京都で「官学」と「在野」との関係を考えるのはなかなかむずかしい。本章の著者も指摘するように京都市史編纂事務局から戦後大

学などに転じた人々はすべて京都の外にその地位を占めたが、だからと言って両者の関係が疎遠になつたわけではないだろう。戦前の京都帝大国史学の「西田史学」の流れは「林屋史学」が受け継いで「在野」となり、戦後、西田が不在となったところに社会経済史学、マルクス主義史学の流れが入ってこちらがいわば「官学」の立場を占めるという役割の交代が起つた。その上に六〇年代末の政治的な対立の時代に今度は「在野」の拠点であった立命館大学から林屋・北山茂夫・奈良本辰也ら多数の研究者が抜けてしまうという変化があったために話が複雑だが、実態としては二つの星雲の一部が重なり合っているような状態で、互いに人的・学問的に影響を与えあいながら平衡を保っていたというところであろう。おおよっぱな言い方で恐縮であるが、それは林屋辰三郎伝とも言える長大な第6章に現れる多くの研究者の名前とそれぞれが果たした役割を見ていってもうかが

えるように思う。その意味でこの章を他の人物に注目して描くと、また異なった「京都の歴史研究」の像が見えるだろう。

コラムにも大変参考になる事項があった。京都市の都市計画に従事した重永潜、栗野秀穂をとりあげたコラム1は、都市計画法の施行と平安京造営が結びつくという点で意外性があり、まだ未知の業績が少なからずあるものだと感じられた。細かい点であるが、コラム2で言及されている京都帝室博物館の京都市への「下賜」は一九二四年（大正一三）のことで、以後一九五二年（昭和二七年）に京都国立博物館になるまで「市民の博物館」となるわけだが、宮内省内部では帝室からの切り離しはかなり早い時期に決まっていたことは『倉富勇三郎日記』大正一〇年六月一四日条に「博物館官制の改正を議し、京都の分館を廃することを決す」という記述があり、東京の上野公園・動物園移管とともに大正震災以前から進んでいた帝室財政の整理の一つとしてやや遅れて実施されたことが知られる。

以下、西田直二郎・林屋辰三郎という流れの中で、本書では取り

上げられていない分野をあげて、今後研究が進むことを期待したい。第一は大正期以降の史跡調査である。これは一九一八年の史蹟名勝天然紀念物保存法の施行の前後に全国的に実施された事業で、京都では歴史関係は西田が、考古関係は梅原末治が調査の中心となった。その成果は二〇冊の報告書として残されているが、調査対象はいわゆる史跡名勝にとどまらず、絵画、彫刻、文書、民俗文化財などにも及び、他府県の報告と比べても多彩でかつ詳細な記述を含んでいる。

第二は美術史と寺院調査である。もともと京都帝国大学文学部には日本美術史の講座はなく、日本美術史を専門にしようとする国史学講座に属することになった。彫刻史の毛利久や絵画史の中野玄三は国史学出身である。戦前は講師であった東伏見邦英が日本美術史を講じており、氏を中心として『宝雲』という美術史の研究誌が敗戦直前まで刊行されていた。また大戦期、府庁の社寺課長は西田門下の赤松俊秀で、戦時統制の一環として施行された宗教団体法に基づく府内の寺院重宝調査は、氏の主導下に行われた。林屋は京都市史編纂に加わる前にこの調査に従事しているが、その調査が徹底したものであったことは、現在京都府教育委員会に残されている当時の調査の記述の細かさからもうかがえるし、私も林屋自身からこの調査では「夜中まで調査に携わった」という話をうかがったことがある。関係者のほとんどは物故されているが、京都の史学史上見逃すことのできないプロジェクトであり、実態の把握が深められることを期待したい。

これだけ幅広い視野で研究を続けてこられたのであれば、やはり埋蔵文化財の発掘についても戦前、戦後に關する研究が欲しいところである。平安京、長岡京とも地下遺構の確認が研究発展の大きな推進力であり、文献や美術工芸品の調査と両輪となって進んできたと言えり。京都市には歴史資料館と並んで小さいながらも考古資料館があり、特色のあるコレクションを形作っている。また京都市以外の各地域における史跡顕彰や遺跡保存の活動にも、まだ埋もれている事実があるに違いない。第2章のような一次史料に基づく研究が増えることを望んでいる。

最後に、第7章では『京都の部落史』編纂が研究の俎上に乗せられている。私は一九八一年に史料収集のアルバイトとして採用されて当時熊野神社前のビルの5階にあった京都部落史研究所に通い始めて以来、『京都の部落史 前近代』の執筆者として一九九五年に同書が刊行されるまで、一〇年以上研究所とご縁があり、その仕事をともに何本かの論文も書かせていただいた。本書の中でも指摘されているように、研究史的に言う身分制研究が大きな転換期に入った時期であったし、それと密接に關連してきた解放運動や同和行政の流れが変わる時期でもあり、研究所は変化の策源地ともなっていた。大学院時代は所属する大学の研究室とは別の「もう一つの研究室」とも言える場所で、特に中世の被差別身分に関する史料を網羅的に確認してゆく作業は、自分の視野を広げるのに大いに役立つた。個人的にも印象深い事業がこのような「史学史」の中に位置付けられるのは感慨深く、あらためて当時の師岡佑行所長の温顔と山本尚友・灘本昌久両氏をはじめとする所員の方々のエネルギーに満ちた活動をなつかしく思い出した次第である。

小林丈広編著『京都における歴史学の誕生―日本史研究の創造者たち―』、ミネルヴァ書房、二〇一四年三月、六〇〇円

現場の声を聞き、先頭に立って引っ張っていく 部落解放同盟中央本部・西島藤彦新書記長に聞く  
サッカーが誘う「非日常性」 いまここにある人種差別を考える 小笠原博毅

水平社論争の群像 20 大和報国運動 朝治武

入門 差別と表現をかながえる 2 井上ひさし『葎原検校』から「盲」をかながえる 編集部

**部落解放 698号** (解放出版社刊, 2014. 9) : 600円

特集 いじめ問題の諸相

本の紹介

藤沢靖介著『部落・差別の歴史—職能・分業、社会的地位、歴史的な性格』 藤井寿一／牧英正著『差別戒名の系譜—偽書『貞観政要格式目』の研究』 吉田徳夫  
制度的レイシズムと闘う 京都朝鮮初級学校襲撃事件の高裁判決の意義と課題 板垣竜太

入門 差別と表現をかながえる 3 ありのままで♪ピノキオの物語 編集部

水平社論争の群像 21 全国水平社消滅 朝治武

**部落解放 699号** (解放出版社刊, 2014. 10) : 600円

特集 韓国時代劇と身分制・被差別民

韓国時代劇が描く朝鮮王朝 康熙奉／身分制を描かなきゃ韓国時代劇じゃない!! 朝治武／『食客』の伝説の解体職人 差別のなかで活躍する白丁 守安敏司／なぜ韓国時代劇は被差別民を描くのか 韓流10年を振り返りながら 高吉美／こうして私は韓国時代劇を楽しんでいる チョ・チム

本の紹介

『ロマ 生きている炎 少数民族の暮らしと言語』 (ロナルド・リー著/金子マーティン訳) 夜陣素子／『部落文化・文明』 (川元祥一著) 河村義人

「踏みにじられた」側に立った取材者の目 中村一成著『ルポ京都朝鮮学校襲撃事件—<ヘイトクライム>に抗して』を読んで 金光敏

インタビュー 私たちは「見える」存在になるべきだ 同性愛を公言するパトリック・リネハン大阪・神戸アメリカ総領事館領事に聞く 神林毅彦

入門 差別と表現をかながえる 4 都議会性差別ヤジ事件「ババア」と意地悪ばあさん 編集部

**部落解放ひろしま 95号** (部落解放同盟広島県連合会刊, 2014. 7) : 1,000円

特集 日本における人権課題—法の实效性と限界—

「旃陀羅」差別に対する本願寺派の「見解」を批判的に分析する 部落解放同盟広島県連合会

**部落史研究報告集 18** (八幡浜部落史研究会刊, 2014. 6)

「色恋」沙汰いろいろ—「紀州藩牢番頭家文書」より— 水本正人

「餌さし」は「餌取り」の流れか 水本正人

歴史教科書 (小・中・高) の記述改訂の分析—古代から近代までの記述を読み解く— 五藤孝人

**部落問題研究 209** (部落問題研究所刊, 2014. 7) : 2,083円

第51回部落問題研究者全国集会報告

全体会 いじめ問題の克服と教育実践 折出健二

歴史1分科会 テーマ 遊廓の存立構造と変容

新吉原における「遊廓社会」と遊女の歴史的な性格—寺社名目金貸付と北信豪農の関わりに着目して— 横山百合子／公娼制度の近代転換期 人見佐知子

歴史2分科会 テーマ 20世紀日本の社会運動—地域と人権の視点から

1920年代の社会運動と在野法曹—自由法曹団を中心に— 吉川圭太

現状分析・理論分科会 テーマ 地域における人権課題を考える

福岡県における同和特別行政を終結させる取り組みと現状 植山光朗／地域における介護・福祉の取り組み 丹波真理, 伊藤みほ／地域における貧困と人権の課題—「貧困の世代連鎖」を中心に— 石倉康次

教育分科会 テーマ いじめ・体罰問題と教育実践

体罰・懲戒問題の論点と解決の方向 吉田一郎

思想・文化分科会 テーマ 人権の深い淵より

宗教者の観点から—人権について 大江真道／『山の音』における女性の群像 中村美子

**本願寺史料研究所報 47号** (本願寺史料研究所刊, 2014. 7)

「本願寺七不思議」について—「名所」としての近世本願寺— 大原実代子

**ライツ 184** (鳥取市人権情報センター刊, 2014. 9)

今月のいちおし!! 『サッカーと人種差別』 (陣野俊史著) 田川朋博

**リベラシオン 154** (福岡県人権研究所刊, 2014. 6) : 1,000円

今、なぜ人権教育・啓発の再構築か—様々な人権問題の共通の構造を見据えて— 稲積謙次郎

羽音豊の歩んだ道

羽音豊年譜／「にんげん・羽音豊」の部落解放運動の軌跡を辿る 堀内忠／役職は関係ない 土にかえっても運動する—羽音豊委員長の教えと交流— 森山沾一／体を張って駆けた闘魂人生—忘れられない、あれこれを偲びつつ— 西尾紀臣／再学<にんげん・羽音豊> 安蘇龍生

ドラマ「明日ママ」と子どもの人権 土井高德

民衆史こぼれ話 片隅に生きた人たち 19 軍師官兵衛と孫左衛門 石瀧豊美

**和歌山研究所通信 48** (和歌山人権研究所刊, 2014. 7)

和歌山の部落史編纂だより 紀州那賀郡井坂・蓮乗寺文書の「大田退衆中宛願如消息」について 武内善信

「特定秘密保護法」は、身元調査を合法化する危険なシステム 野口道彦

**[和歌山人権研究所]紀要 5** (和歌山人権研究所刊, 2014. 7) : 1,000円

堀家文書の魅力—部落問題を中心に 小田直寿

高野山とハンセン病—近代を中心に 矢野治世美

DV家庭で育つ子どもたち—フェミニストカウンセリングの現場から— 井上摩耶子, 竹之下雅代

「障害女性への複合差別」の政策課題化—問題の可視化と当事者のエンパワメントに向けて— 松波めぐみ

滋賀県湖南・甲賀地方の在日コリアン 仲尾宏  
史料紹介 朝鮮総督府・定例局長会議について—15年戦争期を中心に— 田中隆一

The Universal Periodic Review: Between the Ideal and the Reality 坂元茂樹

**地域と人権 1138** (全国地域人権運動総連合刊, 2014. 7. 15) : 150円

国民的融合論との対話—部落問題解決への理論的軌跡と展開— 36 まとめ 1 丹波正史

全国地域人権運動総連合第6回定期全国人会活動方針(案)

**地域と人権 1139** (全国地域人権運動総連合刊, 2014. 8. 15) : 150円

国民的融合論との対話—部落問題解決への理論的軌跡と展開— 37 まとめ 2 「共同体的疎外論」 丹波正史

**地域と人権 1140** (全国地域人権運動総連合刊, 2014. 9. 15) : 150円

差別とは言えない石見銀山遺跡の歴史 大西修

**地域と人権京都 672号** (京都地域人権運動連合会刊, 2014. 7. 1) : 150円

同和奨学金返還問題の検討 35 川部昇

**地域と人権京都 673号** (京都地域人権運動連合会刊, 2014. 7. 15) : 150円

同和奨学金返還問題の検討 36 川部昇

**地域と人権京都 674号** (京都地域人権運動連合会刊, 2014. 8. 1) : 150円

同和奨学金返還問題の検討 37 川部昇

「竹田・深草地区」は、これで良いのか? 2 中川正照

**地域と人権京都 675号** (京都地域人権運動連合会刊, 2014. 8. 15) : 150円

「竹田・深草地区」はこれで良いのか? 3 中川正照

同和奨学金返還問題の検討 38 川部昇

**地域と人権京都 676号** (京都地域人権運動連合会刊, 2014. 9. 1) : 150円

「竹田・深草地区」はこれで良いのか? 4 中川正照

同和奨学金返還問題の検討 39 川部昇

**地域と人権京都 677号** (京都地域人権運動連合会刊, 2014. 9. 15) : 150円

「竹田・深草地区」はこれで良いのか? 5 中川正照

同和奨学金返還問題の検討 40 川部昇

**であい 627** (全国人権教育研究協議会刊, 2014. 6) : 150円

人権文化を拓く 199 私たちの20年のあゆみが今、問われている—「子どもの権利条約」批准20周年を迎えて— 住友剛

**であい 628** (全国人権教育研究協議会刊, 2014. 7) : 150円

人権文化を拓く 200 人権の本当の意味—いじめとおとな 桜井智恵子

**であい 629** (全国人権教育研究協議会刊, 2014. 8) : 150円

人権文化を拓く 201 好感・共感・親近感を育てる人権教育を 明石一郎

**ねっとわーく京都 309** (ねっとわーく京都21刊, 2014. 10) : 514円

ウォッチャーレポート 「呪縛」いまだ解かれず 京都市クリーンセンター「闇早退」問題 寺園敦史

**ノートル・クリティーク 7号** (ノートル・クリティーク編集委員会刊, 2014. 5) : 1,000円

戦後史のなかの被爆者像—ポピュラー文化におけるその定着と変容を中心に— 山本昭宏

インタビュー 昭和—桁世代の南洋移民経験と沖縄戦後闘争—有銘政夫氏に聞く— 成田千尋  
書評

「沖縄問題」からの離脱—富山一郎著『流着の思想』を読む 大野光明/基地社会における土地からの引き剥がしと人々の移動—鳥山淳著『沖縄/基地社会の起源と相克 1945—1956』 持木良太

**ヒューマンライツ 316** (部落解放・人権研究所刊, 2014. 7) : 500円

特集 多様な“性”が共生できる社会へ

各地の人権研究所の取り組み 2 フィールドワーク—時間を歩く 見る・聞く・感じる 長崎人権研究所 阿南重幸

被差別部落の歴史 前近代編 7 寺木伸明

**ヒューマンライツ 317** (部落解放・人権研究所刊, 2014. 8) : 500円

認知症高齢者や家族が安心して暮らせる社会づくり

書評 堀正嗣監訳『ディスアビリティ現象の教育学 イギリス障害学からのアプローチ』 棚田洋平

被差別部落の歴史 前近代編 8 寺木伸明

追悼 思索と行動の研究者 金東勲先生を悼む 窪誠

**ひょうご部落解放 152** (ひょうご部落解放・人権研究所刊, 2014. 3) : 700円

特集 隣保館を活用しよう

隣保館とは?—背景や過程を振り返る—/隣保館の法的位置づけと今後のあり方/兵庫の隣保館が直面する課題とこれから 三澤雅俊

小さな被差別部落のチャレンジ—太陽光発電を活用しての地域活性化— 細田勉

『ある精肉店のはなし』 額瀨あや監督インタビュー 私たちの「食べる」を支える人たちがいる

なかのもん食がたり 3 ホルモンの煮込み

本の紹介 『部落問題と向きあう若者たち』 内田龍史編著

**部落解放 696号** (解放出版社刊, 2014. 7) : 1,000円  
第40回部落解放文学賞

**部落解放 697号** (解放出版社刊, 2014. 8) : 600円

特集 いま、女性の権利を考える

本の紹介 「歴史学の歴史」への新しい模索 小林丈広編著『京都における歴史学の誕生—日本史研究の創造者たち』 今西一

- 解放新聞京都版 995号** (解放新聞社京都支局刊, 2014. 9. 1) : 70円  
歴史と人権 京都めぐり 下河原通りを八坂神社へあるく 東山コース 3
- 解放新聞京都版 996号** (解放新聞社京都支局刊, 2014. 9. 10)  
ハンセン病問題と「関西」 1 関西にもかつて療養所があった
- 解放新聞広島県版 2147号** (解放新聞社広島支局刊, 2014. 9. 15)  
仏教の中の差別と可能性を問う—解放理論をふまえて— 知られていない『経典』の差別 上 小森龍邦
- 架橋 31号** (鳥取市人権情報センター刊, 2014. 8)  
特集 病気、難病、障害をとりまく人権問題 一人ひとりが、自分らしく生きていくために必要な支援を考える  
「鳥取市小地域懇談会充実発展のための実態調査」から感じたこと 田川朋博  
架橋でめぐる全国の人権機関 全国水平社創立宣言を世界の記憶に 水平社博物館
- 語る・かたる・トーク 233** (横浜国際人権センター刊, 2014. 7) : 500円  
「解放教育」継承への扉 30 私が悔しかったのは… 外川正明  
リレー連載 「いじめ」に思う—絵本『わたしの妹』と「わたしの祖母」1/2— おのえさやか
- 語る・かたる・トーク 234** (横浜国際人権センター刊, 2014. 8) : 500円  
「解放教育」継承への扉 31 学校と行政の連携で「教育と福祉」の連携を 外川正明  
「いじめ」に思う—『わたしたちの学級』と「わたしの祖母」2/2— おのえさやか
- かわとはきもの 168** (東京都立皮革技術センター台東支所刊, 2014. 6)  
靴の歴史散歩 113 稲川實  
皮革関連統計資料
- 京都部落問題研究資料センター通信 36号** (京都部落問題研究資料センター刊, 2014. 7)  
報告 2014年度部落史連続講座  
本の紹介  
『若山要助日記』伊東宗裕／『日本の社会主義 原爆反対・原発推進の論理』福家崇洋  
収集逐次刊行物目次 (2014年4月～6月)
- グローブ 78** (世界人権問題研究センター刊, 2014. 7)  
『京都における歴史学の誕生』雑感 川嶋將生  
「五日市憲法」草案と人権 仲尾宏
- 国際人権ひろば 116** (アジア・太平洋人権情報センター刊, 2014. 7) : 350円  
特集 アセアンの人権保障メカニズムの現状
- 試行社通信 333** (八木晃介刊, 2014. 7)  
精神医療の闇と光 洛北・岩倉フィールドワーク
- 社会科学 103** (同志社大学人文科学研究所刊, 2014. 8) : 1,000円  
第1次日韓国交正常化交渉における在日朝鮮人の法的地位と処遇—植民地主義, 分断, 冷戦の交錯— 太田修
- 人権と部落問題 860** (部落問題研究所刊, 2014. 8) : 600円  
特集 いま平和を問う  
文芸の散歩道 発禁にならなかった反軍小説—北見洋二作「怒らすもの」— 秦重雄
- 人権と部落問題 861** (部落問題研究所刊, 2014. 9) : 600円  
特集 えん罪事件はなぜ起こるか  
文芸の散歩道 近世文芸に著された賤民たち—長谷川平蔵の施し— 小原亨
- 人権と部落問題 862** (部落問題研究所刊, 2014. 9) : 1,100円  
特集 地域はいま—「法」失効後の実態—  
京都市 まちづくりの転換点での現状と課題 京都地域人権運動連合会京都市協議会  
人権と部落問題をめぐる主な動き (2013年4月～2014年3月)  
2013年度部落問題研究所定期誌総目次  
2013年度部落問題研究所刊行・文献目録
- じんけんぶんかまちづくり 44号** (とよなか人権文化まちづくり協会刊, 2014. 7)  
「にくのひと」上映中止事件を考える 佐佐木寛治  
2014連続講座「部落差別、その根っこを考える」第1講 歴史編「部落史再考」(寺木伸明さん) 報告
- 季刊人権問題 376号** (兵庫人権問題研究所刊, 2014. 7) : 700円  
八鹿高校事件の真実を改めて世に問う 14 全国から八鹿へ 1 解放運動の転機となった「八鹿高校事件」2つの現地調査でみえたもの 植山光朗  
季刊「人権問題」の総目次 (第33号～36号)
- 振興会通信 117号** (同和教育振興会刊, 2014. 7)  
同朋運動史の窓 24 左右田昌幸
- 人文学報 105号** (京都大学人文科学研究所刊, 2014. 6)  
洛北松ヶ崎地区の近代と朝鮮人労働者 高野昭雄  
書評 吉村智博著『近代大阪の部落と寄せ場—都市の周縁社会史—』小林丈広
- [世界人権問題研究センター]研究紀要 19号** (世界人権問題研究センター刊, 2014. 4) : 2,500円  
安保理決議1325号と関連決議の実施を通じた「女性と平和・安全保障」の課題への取り組みの現状と課題 三輪敦子  
米州人権保障制度における国の人権保障義務の範囲—領域外適用を基礎づける管轄の連関— 杉木志帆  
中世鞍馬寺における勸進聖の存在形態 野地秀俊  
祭礼警固から先払いへ—神社祭礼と被差別民をめぐる予備的考察 中野洋平  
17世紀における清水坂「犬神人」の基礎的考察 村上紀夫  
まちづくりにおけるエリアマネジメント導入過程の研究—崇仁地域の事例から— 山本崇記  
日本の帰化行政とインターネット情報の影響—行政書士への調査を中心に— 李洙任

## 収集逐次刊行物目次 (2014年7月～9月受入)

～各逐次刊行物の目次の中から部落問題関係のものを中心にピックアップしました～

**明日を拓く 104** (東日本部落解放研究所刊, 2014. 2) : 1,080円

特集 日本社会の今を問う…—ヘイトスピーチ・『週刊朝日』部落差別事件などをめぐって—

デヴィッド・マクニールさんインタビュー 在特会、ヘイトスピーチと日本社会 聞き手/友常勉/出版活動と部落差別—編集者の経験から 川上隆志/前田朗さんに聞く ヘイトクライム・ヘイトスピーチの受けとめと日本社会・欧米社会—人権被害の法的アクセス権をめぐって 聞き手/井桁碧・吉田勉

古文書を楽しむ 7 和田村小頭与右衛門非法訴訟吟味下願 石井昭一郎

書評 朝治武著『差別と反逆 平野小剣の生涯』 大串夏身

**IMADR-JC通信 178** (反差別国際運動日本委員会刊, 2014. 5) : 750円

特集 識字と人権

識字学級の現状にみる日本の識字のいま 棚田洋平/日之出よみかき教室の現場から 菅原智恵美/企業の社会貢献としてとりくまれた安田識字基金の終了にあたって 友永健三/ネパールのダリット女性運動と識字 白根大輔/南アジア地域におけるダリットの教育へのアクセス 国際ダリット連帯ネットワーク

**解放新聞 2673号** (解放新聞社刊, 2014. 7. 7) : 90円  
第59回全国女性集会 奈良・東之阪フィールドワーク[報告]

**解放新聞 2674号** (解放新聞社刊, 2014. 7. 14) : 90円  
集団的自衛権行使容認の閣議決定の暴挙にたいする抗議声明 部落解放同盟中央本部

解放の文学 99 原爆の子きょう竹会編『「原爆の子」その後』 音谷健郎

**解放新聞 2676号** (解放新聞社刊, 2014. 7. 28) : 90円  
ぶらくを読む 89 猿楽・能楽と中世社会—芸能の神”摩

多羅神”の生成過程と正体 湧水野亮輔

**解放新聞 2679号** (解放新聞社刊, 2014. 8. 18) : 90円  
解放の文学 100 野間宏『青年の環』 部落から何を学ぶか 音谷健郎

取り調べ録音テープを分析した浜田鑑定を読み解く 1

**解放新聞 2680号** (解放新聞社刊, 2014. 8. 25) : 90円

取り調べ録音テープを分析した浜田鑑定を読み解く 2

**解放新聞 2682号** (解放新聞社刊, 2014. 9. 8) : 90円  
ぶらくを読む 90 再び伝統芸能の始原へ 3 文楽(人形浄瑠璃)こそ芝居の祖型 湧水野亮輔

**解放新聞 2683号** (解放新聞社刊, 2014. 9. 15) : 90円  
今月の本@ランダム

『靖国史観 日本思想を読みなおす』(小島毅著) / 『ネグリ、日本と向き合う』(アントニオ・ネグリ著) / 『瞽女うた』(ジェラルド・グローマー著)

今週の1冊 『転換期の日本へ』(ジョン・W・ダワー, ガバン・マコーマック著)

**解放新聞京都版 991号** (解放新聞社京都支局刊, 2014. 7. 10) : 70円

歴史と人権 京都めぐり 西陣コース(前半) 北野天満宮から上七軒を歩く

**解放新聞京都版 992号** (解放新聞社京都支局刊, 2014. 7. 20) : 70円

歴史と人権 京都めぐり 西陣コース(後半) 上七軒から千本通り界限を歩く

**解放新聞京都版 993号** (解放新聞社京都支局刊, 2014. 8. 1) : 70円

歴史と人権 京都めぐり 六道之辻から四条通りへあるく 東山コース その1

**解放新聞京都版 994号** (解放新聞社京都支局刊, 2014. 8. 10) : 70円

歴史と人権 京都めぐり 建仁寺を経て八坂庚申堂へあるく 東山コース その2

### 事務局よりお知らせ

◇田中和男さんに八木聖弥さんの『近代京都の施薬院』をご紹介します。八木さんには11月28日に、部落史連続講座でお話をさせていただくことになっていますので、今号の紹介文を参考にいただき、是非講座へご参加ください。

◇田良島哲さんにご紹介いただきました『京都における歴史学の誕生』は、資料室で閲覧することができます。また、購入もしていただけますのでどうぞご利用ください。

□所在地 〒603-8151 京都市北区小山下総町5-1 京都府部落解放センター3階

□TEL/FAX 075-415-1032

□URL <http://suishinkyokai.jp/shiryo/index.html>

□開室日時 月曜日～金曜日 第2・4土曜日 11時～17時(祝日・木曜(月2回)・年末年始は休みます)

□交通機関 市営地下鉄烏丸線「鞍馬口」駅(京都駅より約10分)下車 北へ徒歩5分